

の気配をうかゞふらしく、低い唸り声をたて、ゐたのだったが、それもどこかへ去ってしまつてゐた。

住居のなかには、ひとすじの灯影もなかつた。二階の居間には、女の夜具が、乱れたあともなく、きちんとあつてあつた。傍の火鉢の火も、深く灰をかぶつたまま、絶えか、つてゐた。

そのまゝ、夜がふけていった。

やうやく重い雲がきれかゝつて、月光がもれだした。屋根は濡れながら光つてゐた。宵のうち、しばらく暴れまはつてゐた鼠が、天井裏でまた跳ねまわりだした。時々、けた、ましい音をたて、ゐた。その合間に、重たいものを引きずるやうな鈍い音が交つてゐた。蛇が天井に入つてゐるのだった。

一匹の鼠が土埃りをあげて跳ねまはつてゐたが、やうやくひとときり、元のしづけさに返つた天井裏には、やがて、一すじの青白い月の光が、屋根裏のわずかな隙間をくゞつて、針のやうに落ちてきた。その光りのなかに、糸のやうな煤が、幽かにゆれながら、一すじ吊りかゝつてゐた。

鼠は、何処からともなく、畳の上を下りてゐた。人氣のない寢床のまはりを、蹴るやうにぐる／＼廻つて、勢ひよく、片隅の茶棚の上に飛上つた。重ねた茶碗の一つが、がたりとこつた。宵のうちに、女が洗つて拭いたまゝ、伏せた茶道具は、漆の盆の上で、すっかり乾いてゐた。障子の穴を抜けて、雨戸伝ひに走り、戸袋の中にかくれてしまふまで、鼠はまた高い音を投げちらした。戸袋の隅には、腐りかけた魚の小骨が、微かに青い光を放つてゐた。それに近く、蠅と蚊が並んでとまつてゐた。

天井にも、火鉢の真上にあたるところに、二匹の蠅がとまつてゐた。

雲のきれめが、また深くとぢた。天井裏に射してゐた青白い光も、煤の糸も、消えてしまつた。鈍い引ずるやうな音が、また思ひだしたやうにはじまつた。

戸袋の中へ飛込んだまゝ、静まつた鼠が、ひどい埃まみれの姿を、床下に現しはじめた。床下は一層暗かつた。そして、湿っぽいひんやりしたかぜが、冷たい空気の中に流れてゐた。小さな茸が二三本かたまつて、細そりした首をならべてゐた。その根元に、枇杷の実が一つ芽をだしかけて転げてゐた。その下には、柔かにほぐれた土の中で、蚯蚓が一匹よぢれて蠢いてゐた。月光がまたもれだした。

勝手へ出て、水甕のふちを危く飛下りると、鼠は、板の間に大きな音をたて、走つた。その時に、頭からかむつてゐた埃りが大方落とされた。

二、三度板敷の上を馳けまはつてゐた鼠は、やがて、そろ／＼土間の上に渡した梁を渡りはじめた、そして中ほどまで渡りかけると、急に、驚いたやうに走つて壁の穴をくゞると、そのまま、天井裏へぬけて、何処かしら姿をかくしてしまつた。

それきり、家の中のもの、音はたえてしまつた。そろ／＼風が吹きかけるらしかつた。

しばらくして、茶畑づたひに近づいて来る男の姿があつた。男は、牛乳の瓶を一本、勝手口の雨戸のすそに立てかけると、また茶畑を戻つて行つた。男の姿が見えなくなる頃、牛乳の瓶